

研究ノート

素性照合を用いたガ・ノ交替現象の分析試案

中 井 悟

1 はじめに

本稿は、ガ・ノ交替現象を新たな観点から分析し、その分析法を他の格助詞の交替にも適用し、日本語の格助詞の交替を統一的に説明してみようとする一つの試案である。こんなことも考えてみてはどうだろうかという提案である。

本稿の構成は次のようになっている。まず、第2節でガ・ノ交替現象がいかなるものかを説明し、Harada (1971) と Bedell (1972) に代表される初期の生成文法によるガ・ノ交替現象の分析を紹介する。第3節では、Maki & Uchibori (2008) を利用して、ノ格主語の派生に焦点を当てたガ・ノ交替現象の生成文法による研究の歴史を概観し、長い間研究されてはきたが、ガ・ノ交替現象は未だ解決されていない問題であることを確認する。そして、従来行われてきたような、ノ格主語の派生だけに焦点を当てた分析以外に、観点を変えて、ノ格名詞句の意味・用法をあらためて調査する必要があることを述べる。第3節までは、筆者が提案する新たな分析が従来の分析とは異なることをよりよく理解してもらうための背景の説明である。ノ格名詞句の意味・用法を確認するために、第4節では、国立国語研究所 (1951) に基づいて、ノ格名詞句の意味・用法を調べ、ノ格名詞句の主語としての用法は、ノ格名詞句の多くの用法のひとつにすぎないことを確認し、さらに、第5節で、ノ格名詞句の主語としての用法はノ格名詞句のひとつの用法にすぎないことを強調して、ノ格名詞句は連体修飾語であると主張する山橋幸子の研究を検討する。第6節では、山橋幸子が主張するように、ノ格名詞句は連

体修飾語であるという前提で、素性照合によるノ格名詞句の主語としての用法の分析を提案し、さらに、第7節では、素性照合による分析によって、ガ・ノ交替だけでなく、ヲ・ガ交替、ガ・ニ交替といった他の助詞の交替現象も統一的に説明できることをみる。第8節はまとめである。

2 ガ・ノ交替現象とは

日本語におけるガ・ノ交替現象（たとえば、「太郎が買った本」は「太郎の買った本」とも言える）は、初期生成文法（変形文法と呼ばれていた時期）から多くの研究者たちによって論じられてきた（たとえば、Bedell (1972), Harada (1971), Nakai (1980), Shibatani (1975) など）。初期の生成文法の分析は、Ga-No Conversion と呼ばれる変形規則でもって、関係節や名詞句補文中のガ格をノ格に変えるというものであった。Harada (1971, p. 28) の次のような変形規則が代表的なものである。

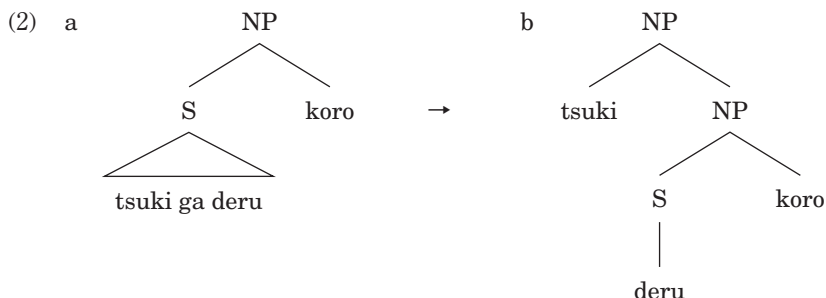
(1) Ga-No Conversion (optional)

X [NP [s Y - NP -ga - Z - PRED]s -N]NP - W

1 2 3 4 5 6 7 8

→ 1 2 3 no 5 6 7 8

この規則ではガがノに交替するだけで構造上の変化はない。しかし、Bedell (1972) は、Ga-No Conversion のような変形規則は存在せず、(2a) のような構造を (2b) のように変える規則があるのだと主張している。(Bedell, 1972, pp. 13-14)



この (2b) の構造に次のような規則でノが挿入され、「月が出るころ」から「月の出ころ」が派生されるのである。

- (3) No is introduced between any two nouns or noun phrases which are constituents of the same larger noun phrase. (Bedell, 1972, p. 9)

つまり、「月の」は主語の位置ではなく、「太郎の本」の「太郎の」と同じ連体修飾語（あるいは、所有を表す *Determiner*）の位置にあるという主張である。¹

Bedell (1972) の「月の」が主語ではなく連体修飾語であるという説は松下 (1930) に基づいている。Bedell (1972, p. 13) は松下 (1930) から次の一節を引用している。

Deru . . . is a verb, and predicates a state of affairs. The tsuki no expresses the agent of that state of affairs. Because it expresses the agent of the state of affairs, the meaning will come through if it is changed into a subject, as tsuki ga. However, tsuki no differs from a subject. It is after all an attribute. It is not an expression of the agent as an agent, but an expression of the agent as a property

of the state of affairs. Therefore ga is not used, and no is. Tsuki no deru 'the moon's rising' is not tsuki ga deru 'the moon rises', but expresses, with respect to 'the moon', its 'rising'. Therefore I do not call this a subjective case, but an attributive case which expresses the agent, and I call this usage the agentive use of the attributive case. (pp. 259-60) (ページは松下 (1930) のもの)

元の松下 (1930) の説明は以下のようなものである。(漢字と仮名遣は現代のものに変更してある.)

「の」の用法, 二, ——体言に付いて事柄の主体を表す.

△△

△△

1 月の出る頃

雨の降る日

の「△△」は動詞であって或る事柄を叙述している。そうして上の「△△」はその事柄の主体を表している。事柄の主体を表すのであるから之を主語に換えて「月が」「雨が」…の如く言っても意義は通ずる。しかし「△△」は主語とは違う。やはり連体語である。主体を主体として表すのではなく主体を以て事柄の所属を表すのである。だから「が」を用いずに「の」を用いる。「月の出る」は「月が出る」ではなく、月というものに就いての其れの「出る」を表すのである。故に主格と云わずに主体を表す連体格と云い、その用法を連体格の主体的用法という。但し普通の文法書は之を主格と混同している。(pp. 259-260)

松下 (1930) は、「月の」は形態上は属格ではあるが、意味上は「出る」の主語であると言っているのである。

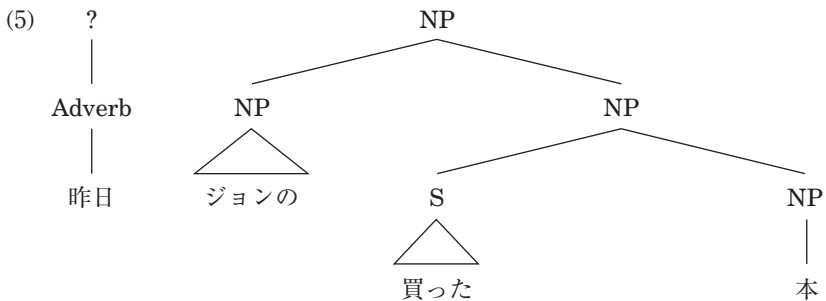
ガ・ノ交替現象の研究では、このノ格の名詞句が、Harada (1971) が公

式化しているように主語の位置にあるのか、あるいは、Bedell (1972) が主張するように連体修飾語の位置にあるのかをめぐって論争が繰り広げられてきたのである。

ノ格が連体修飾語の位置にあるという主張に対する決定的な反例が Nakai (1980, pp. 313-314) で提出されている。(4) がその例である。(原文はローマ字表記。)

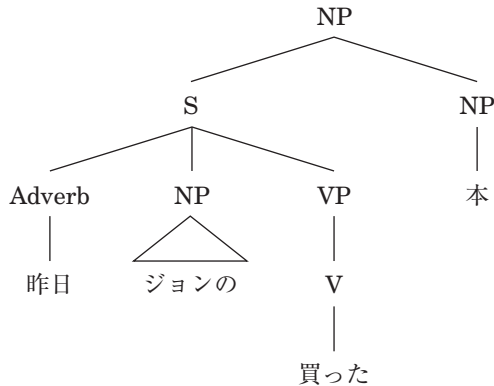
(4) これは昨日ジョンの買った本です。

この文の「ジョンの買った本」の中で、「ジョンの」が連体修飾語の位置にあるとすると、「買った」を修飾する副詞の「昨日」が「本」を修飾する関係節の外に位置することになり、宙ぶらりんになってしまうのである。² (Nakai (1980) では、「ジョンの」は PP (Postpositional Phrase) と表示されている。)



したがって、「昨日ジョンの買った本」という名詞句の構造は(6)のようにならざるをえない。

(6)



この決定的な反例によって、ノ格名詞句が連体修飾語の位置にあるという説は放棄され、ノ格名詞句は主語の位置に留まっていると見なされるようになったのである。

ただし、生成文法の理論自体が変わってきたので、論争は別の形で続いている。問題となっているのは、このノ格が、overt な表示（つまり、syntax のレベルでの表示）と covert な表示（つまり、LF のレベルでの表示）でどの位置にあるのか、そして、どのようにして認可されるかである。(4) のような文で、「ジョンの」は overt な表示では連体修飾語の位置には来られないが、covert な表示では連体修飾語の位置に来ることができる。何らかの手段で属格が認可されればよいのである。もちろん、現在の理論では、ガ格名詞句がノ格名詞句に変わるということはなく、元々ノ格名詞句である。

本稿は、このガ・ノ交替現象の研究を振り返り、新たな観点から新しい分析を模索しようとする試みである。

3 ガ・ノ交替現象の研究の歴史 — Maki & Uchibori (2008) のまとめ —

ガ・ノ交替現象の分析に関しては、Maki & Uchibori (2008) が整理してまとめているので、Maki & Uchibori (2008) を利用して、これまでの分析を整理しておこう。取り上げられているのは、DP Approach と Non-DP Approach である。³

まず、Maki & Uchibori (2008) は、二つの分析のそれぞれを支持する二つの例文を挙げている。(元々はローマ字書きであるが、読みやすくするために漢字・仮名混じり文で表記することにする。)

(7) 私は [[ジョンが／の来た] 理由] を知っている。

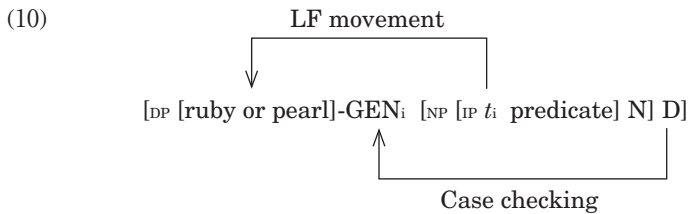
(8) ジョンは [雨が／のやむまで] オフィスにいた。(p. 193)

(7) の例文は、典型的なガ・ノ交替の文であり、「理由」という名詞を修飾する関係節内で「ジョンの」という属格が現れている。ガ・ノ交替は名詞を修飾する関係節と名詞句補文でのみ起こるとされていたからである。しかし、(8) の例文では、後続する名詞がないのに、「雨の」という属格が現れている。Maki & Uchibori (2008) は、このガ・ノ交替構文に関する問題は、属格の DP が句構造のどの位置にあるかということと、属格を認可するのは何かということであるとしている。

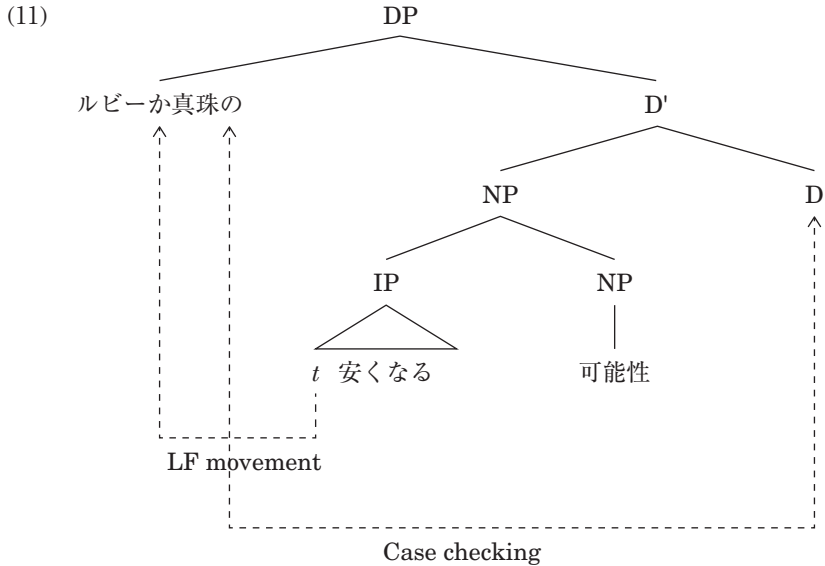
まず、DP Approach として Miyagawa (1993) を紹介している。Miyagawa (1993) が提案している仮説は以下のようなものである。⁴

- (9) a. The genitive subject in a prenominal gapless clause raises into Spec,DP.
 b. This movement takes place in LF.
 c. Spec,DP may be A- or A'-position. (Maki & Uchibori, 2008, p. 194)

「ルビーか真珠の安くなる可能性」という例（この例は, Maki & Uchibori (2008, p. 195) の例文 (6) の中にあるものである）を図解したものが以下である。（Maki & Uchibori, 2008, p. 195）



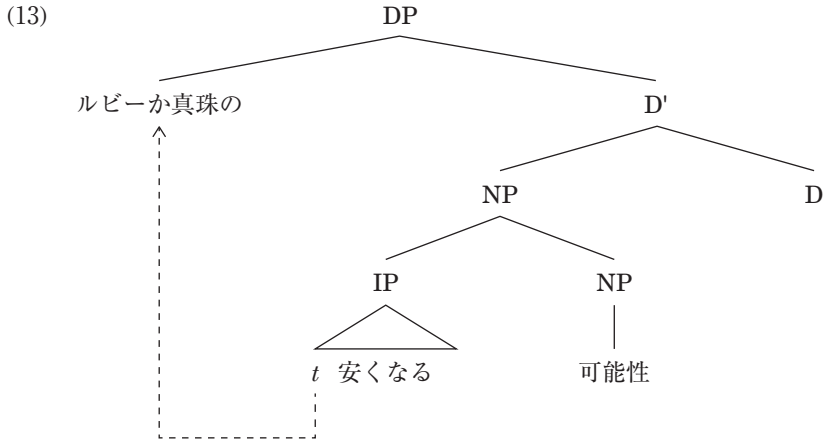
樹形図に直してみよう。（日本語表記に変更してある。）



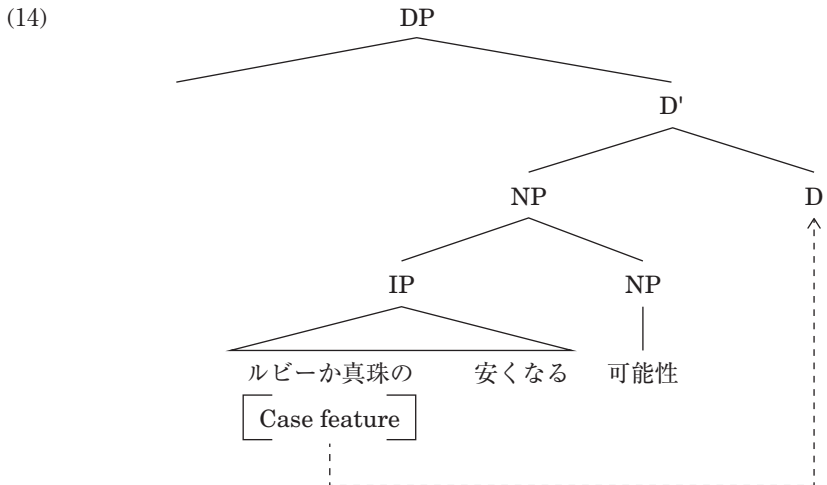
もう一つの DP Approach として, Maki & Uchibori (2008) は, Ochi (2001) を紹介している. Ochi (2001) は次の三つの仮説を提案している.

- (12)
- a. The genitive subject in a prenominal gapless clause is licensed by moving into Spec,DP in overt syntax or by moving the Case feature of the genitive subject to D in covert syntax.
 - b. The genitive subject in a relative clause is licensed by moving the Case feature of the genitive subject to D in covert syntax.
 - c. Spec,DP is consistently an A-position. (Maki & Uchibori, 2008, p. 197)

(12a) の仮説を樹形図で解説してみよう. まず, 前半の overt syntax で移動する場合である.



次に covert syntax で主語の Case feature が移動する場合である.



Maki & Uchibori (2008) は, Ochi (2001) の DP Approach の問題点を次のように指摘している.⁵

We have seen that the DP/movement approach by Ochi (2001) is attractive and accounts for important data. However, it contains one theoretical problem: it is not clear why overt raising of the genitive subject is optional—that is, in some cases, it may move to Spec,DP in overt syntax, and in other cases, only the Case feature of the genitive subject moves to D in covert syntax. Ochi (2001:sect. 4.3.) attempts to answer this question. He states that what actually checks genitive Case is N, not D, and D, when it is present, triggers the overt raising of the genitive subject. If this is correct, though, a problem emerges in terms of the categorical status of a given nominal expression, because a complex NP with a prenominal gapless clause is an NP in cases such as (15a) with the in-situ reading, and the same complex NP is a DP in cases such as (15a) with the raising reading. It is theoretically desirable if nominal expressions are consistently NPs or DPs. (p. 199)

次に、もう一つの分析の Non-DP Approach を紹介しよう。Maki & Uchibori (2008) は、Non-DP Approach として Hiraiwa (2001) を紹介している。

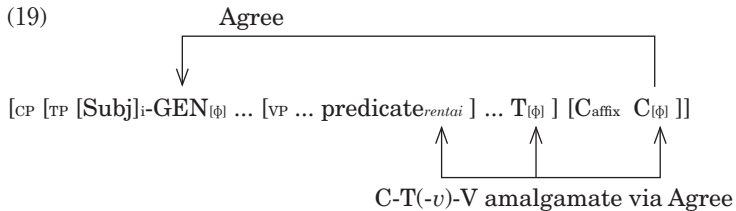
Hiraiwa (2001) の仮説は、属格が現れるのは、節の後に名詞が後続するから（したがって、ノ格主語は関係節と名詞句補文にしか現れないとされてきた）ではなく、節の動詞が連体形であるからだということである。なぜなら、名詞が後続しなくても属格が出現する例があるからである。たとえば、以下のような例である。（元々はローマ字表記であるが、読みやすくするために漢字・仮名混じり文で表記することにする。）

- (15) a. ジョンは [メアリーが／の読んだより] たくさんの本を読んだ。

- b. ジョンは〔雨が／のやむまで〕オフィスにいた。
 c. このあたりは〔日が／の暮れるにつれ〕冷え込んでくる. (Maki & Uchibori, 2008, p. 200)

Hiraiwa (2001) の説では、属格を認可するのは C である. Maki & Uchibori (2008, p. 201) は、Hiraiwa (2001) の属格主語の認可を次のように説明している.⁶ (例文番号は Maki & Uchibori (2008) のもの.)

Given this, the examples in (18) are analyzed in the following way. In each, the clause in the brackets is assumed to be dominated by C_{affix} , and this C_{affix} licenses genitive Case of the subject of the clause via Agree. This is schematically shown in (19).



The *rentai* form thus indicates an occurrence of the Agree relation among C_{affix} , T, (*v*), and the predicate, which enables licensing of genitive Case for the subject.

しかし、Maki & Uchibori (2008) は、Hiraiwa (2001) の仮説は支持できないと述べている. というのは、Hiraiwa (2001) は、後続する名詞がない場合にも属格主語が使われることがあると言っているが、実は、抽象的な名詞が隠れていると見なされるからである. Maki & Uchibori (2008) は、

以下のような例を挙げている。(元々はローマ字表記であるが、読みやすくするために漢字・仮名混じり文で表記することにする。下線部は原文ではイタリック体である。)

- (16) a. ジョンは [メアリーが／の読んだ程度／のより] たくさんの本を
読んだ。
b. ジョンは [雨が／のやむとき／時間まで] オフィスにいた。
c. このあたりは [日が／の暮れるのにつれ] 冷え込んでくる。
(Maki & Uchibori, 2008, p. 203)

Maki & Uchibori (2008) は次のようにまとめている。

To summarize the problem for the non-DP approach, the examples that Hiraiwa (2001a) provides to support the non-DP approach all turn out to have counterparts that contain a noun or a clause nominalizer. This suggests that the “head-noun-less” examples that Hiraiwa offers are instances in which a nominal element such as a head noun or a nominalizer is simply unpronounced in the overt form but present in the structure. (p. 205)

Maki & Uchibori (2008) を見ると、DP Approach に分がありそうであるが、論争は未だ続いている。

ガ・ノ交替現象に関するこれまでの研究は属格主語がどのように派生されるかが焦点であったように思える。問題を解決するためには、視点を变えて、属格主語の特性をもっと調査してみる必要があると思われる。大島 (2010) も、最近のガ・ノ交替現象の研究に関して次のように批判している。

ただし、最近の研究は、いずれもこのような「がの交替」などと呼ばれる現象を通じて、統語論上の一般的な原理を考えるという姿勢によるものであり、この現象そのものの、統語的・意味的な特徴づけに関してはさほど深い考察がなされていないように思われる。たとえば、主格表示に「が」を用いた場合と「の」を用いた場合とで意味的に大きな差異が感じられないことが多いが、差異がないのだすれば、「の」を用いた構造がなぜ存在するのかが問題になる。従来の考察ではこの点について明確な解答が示されていないのである。(p. 63)

4 ノ格の意味・用法

そこで、改めてノ格の意味・用法を確認しておこうと思う。何か新しい展望が開けるかもしれない。

手がかりとして、国立国語研究所(1951)が参考になる。この報告書は、日本語の助詞と助動詞に関して、1949年から1950年にかけて発行された新聞・雑誌から実例を集め、その用法に従って分類したものである。そのうちの格助詞の「の」に関する部分(pp. 155-171)に挙げられている、「の」の用法とその実例の一部を紹介する。(ただし、「～のせい」のように、他の語と結合して使われている「の」は省略してある。)該当の「の」には下線を引いておいた(原文ではボールド)。また、出典は省略した。(ただし、末尾に(資料外)と書かれている例文は、資料外から得られた例文や創作された例文のこととのことである。)

- ①体言について、後続の体言がその体言に所属するものであることを示す。

(イ)所有主。(後の体言が前の体言の持ち物・属性などの場合。)

○ガン吉のバットからとびだした猛球一ぱつ!

(ロ)執筆者・発信者・主催者・主演者など、後の体言の作成行為をなした者.

○まるで光琳の豪華けんらんな金屏風でもめぐらしたような、百花の咲きにおうそのお庭のうつくしさを、～

(ハ)所属の団体. (ク～に属するクの意.)

○～の改正については、衆議院の選挙法改正委員会および民自党内の選挙改正委員会の両方で研究を進めている

(ニ)なんらかの関係(人間関係・数量関係・空間関係 etc.)の基点となるもの.

○～, 一切の犠牲負担を学童の父兄その他一般地方民に転嫁しているではないか.

(ホ)存在の場所・位置.

○～愛知県彌富町の近鉄電車彌富駅で～

(ヘ)抽象的な場所. (ク～における～クの意.)

○こゝに論理上の欠陥はほとんどないといえよう.

(ト)選択の範囲. (ク～の中の～クの意.)

○このような結果を見ると、長方形植と正方形植との何れがよいかと思ひ迷うのも無理からぬことである.

(チ)存在の時刻・時期.

○昭和九年の十月二十九日の、午前八時三十分ごろに、新宿を、出る汽車に、由比は、乗った.

②体言について、その体言が後続の体言の属性に当ることを示す.

(イ)性質・性格・状態.

○～大部分が廿二、三才の青年、中には芸者を身請けしていた者なども～

(ロ)材料. (「～でできた～」の意)

○半熟玉子や卵黄だけの茶碗蒸などにして、 $\frac{1}{4}$ くらいずつ増し

てゆき、約十日で全卵一箇が食べられるようにします。

(ハ)数量・順序.

○明春の参議院選挙には、民自党としては八十名くらいの当選を目標とし、残る二十数名の六年議員と合計して百名の参議院内勢力にしたい、～

(ニ)サ変動詞の語幹となる体言（主として漢語）について、その体言が、後続の体言に関連する動作内容であることを示す。（「～する（した etc.）～」の意）

○吉村隊事件調査の結論で意見対立の参院在外同胞委員会は、～

(ホ)形容動詞の連体形語尾に準ずる用法.

○われわれが本予算案をもって、インフレを克服するものではなく、それを悪質のものに内訌せしめるに過ぎないと断じたのはこのことである.

(ヘ)体言についてその体言が後続の体言の範囲・領域を示す場合.

○～、大衆の一部の人々には新聞記事に似たこの文体が～

(ト)目的の事物・関与物を示す.

(a) 目的の事物.（「～のための」の意）

○～キャルマタ姿の少年少女が客寄せの愛嬌を振りまいている.

(b) 〃に関する〃の意.

○民主主義の教科書

(チ)同格の関係で修飾する.

(a) 同じ内容を違った語で表現して結びつける際のつなぎ.

○そこに御主人のテイラー軍曹が入って来た.

(b) 指示代名詞その他指示する語につく場合.

○この家の主人のただ一人のみよりだというので、～

(リ)形式名詞に接続する場合.

○今日の教育は国民全体のための教育である.

- ③述語が連体形で終わる節（「～の～する〔活用語連体形〕＋体言」の形）の主語・対象語を示す。（「～が～すること」P. 16, 19 参照.）

(イ)主語

○夏は胃腸の弱る時期，食物のいたみやすい季節です。

(ロ)対象語

○「お茶の飲みたい人はいませんか。」（資料外）

- ④結びつけられる二つの体言のうち，後者が動詞の連用形またはサ変動詞の語幹となる体言（主として漢語）の場合。

(イ)動作の主語。

○～彼女はモデルだと云って，アパートの係の少年に，ディックの部屋へ入れて貰い，彼の帰りを待つことにしたが，～

(ロ)動作の客語。

○～崇明島の占領により全江蘇省は中共軍の手中に帰した

(イ)動作の対象語。

○～とは言うものの，金のほしさよ。（資料外）

- ⑤々ようだ々々ごとしで受ける場合。

○この原理は次のようである。

このように，ノ格の意味・用法は多岐にわたっている。山口と秋本（2001）は，「の」の用法は多岐にわたっているので，「の」の用法を分類することは意味のあることではないとまで言っているほどである。

「の」を連体格助詞とするのは，このように「体言」と「体言」とを格関係で結ぶからだと言えるはずだが，連用関係の場合には多くの格助詞が存在して，様々な格関係が形式的に分化して示されるのに比べて，連体関係は唯ひとつ「の」一語（「が」のことはここでは問わない）が一手にひき受けている。つまり，修飾に立つ体言と被修飾に立

つ体言との意味的關係は多岐にわたることになり（これを「超論理的關係」とも説明される）、それを論理的に分類整理することはあまり意味のあることではない。唯ひとつ構文論的に意味決定上の用法として言えることは、「の」の付く体言の意味内容が、それを受ける下の体言の意味内容を修飾し限定するという関係（語順）にあるということとで、その逆はあり得ないことである。（p. 615）

このようにノ格の意味・用法が多岐にわたっているということは、ノ格が連体節で主語を表すのは、松下（1930）が主張しているように、ノ格の一用法にすぎないということである。ノ格が連体節で主語を表すのはノ格の一用法にすぎないということを強調しているのが、山橋幸子である。山橋の研究を見てみよう。

5 ノ格は連体修飾語である—山橋の主張—

山橋は、Yamahashi (1988)、山橋 (1998)、山橋 (2000) で、ガ・ノ交替現象を研究しているが、山橋 (2000) で、すでに引用した松下 (1930, pp. 259-260) の箇所を引用した後で、ノ格名詞句は連体修飾語であると主張している。（例文の番号は山橋 (2000) のものである。【 】で囲った部分は、山橋ではなく、筆者による注である。）

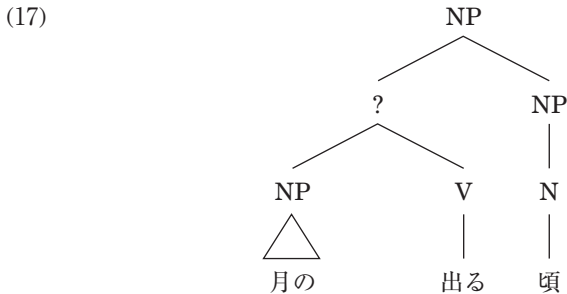
つまり、「名詞—ノ」は動詞の表す概念の主体としての所有者であり、下記に示すように、文法的には動詞の修飾語として補充関係を保ちながら、後続の名詞を修飾する。

(13) 〔名詞句 [[名詞—ノ] [動詞]] 名詞

従って、松下大三郎の立場から (12) 【月が出る頃】をあえて英語で表現するなら、“the time of the moon’s rising”ということになり、「月

ノ」は「出る」と修飾語・被修飾語として文法関係を結び、まとまって「頃」を修飾していることになる。換言すると、(12)の「月ノ」は、それ自身で単独に「頃」を修飾する「月の頃」の「月の」とは異なるということである。(pp. 18-19)

山橋(2000)は「月ノ」は連体修飾語であると言っているが、上の引用を注意深く読むと、Bedell(1972)とは異なる構造を主張している。山橋(2000)の(13)を樹形図で表示すると以下のようになる。

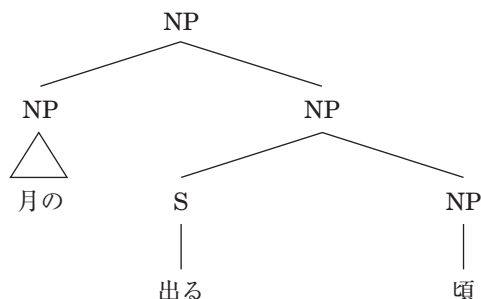


山橋(2000)はノ格名詞句は連体修飾語であると言っているが、そのノ格名詞句は連体修飾語の位置にはなく、主語の位置にあることになる。山橋は、「『月ノ』は『出る』と修飾語・被修飾語として文法関係を結び、まとまって『頃』を修飾していることになる」と言い、また、「(12)の『月ノ』は、それ自身で単独に『頃』を修飾する『月の頃』の『月の』とは異なる」と言っているからである。ただし、(13)の[[名詞ーノ][動詞]]の構造には統語範疇が表示されていないので、上図では、[月の出る]の範疇を?にしてある。

一方、Bedell(1972)では、「月の」は、「出る頃」という名詞句を修飾する連体修飾語である。Bedell(1972)が主張する構造は以下に示す通りであ

る。

(18)



山橋 (2000) は、ノ格名詞句は連体修飾語であるという説を支持する証拠をいくつか提示している。まず、ガ格名詞句とは異なり、ノ格名詞句と動詞の間には「その」を使うことができると指摘している。(例文番号と下線は山橋 (2000) のもの。)⁷

(14) a 君ガ泣きたい気持ちは分る

b 君ノ泣きたい気持ちは分る (= 3)

(15) a *君ガその泣きたい気持ちは分る

b 君ノその泣きたい気持ちは分る

前述のように (14) は表面上ガ／ノ交替が可能である。しかし動詞との間に連体修飾語の一種である「その」が現れる (15) においては状況が異なる。ガを含む (15) a が非文なのは、「君ガ」と動詞「泣きたい」が主語・述語という文法関係で結ばれている為である。しかし、ノを含む (15) b が容認されるのは、「君ノ」が「その」と同様連体修飾語であり、後続の名詞「気持ち」とは文法関係を持つが、動詞との文法関係はないからである。(p. 19)

山橋（2000）は、牧野（1980）が指摘している、ノ格名詞句と動詞の間にある語が多ければ多いほど文の容認度が下がるということもノ格名詞句が主格ではなく連体修飾語であることの証拠であると主張している。（例文番号は山橋（2000）のもの。）

又、ガ／ノ交替は、埋め込み文においても常に可能ではないことは、よく知られている。牧野によると、下記の例が示すように、「名詞—ノ」と動詞の間にある語が多ければ多いほどガをノに替えることが難しくなる。

(18) a 太郎は花子ノおとし書いた論文に目を通した

b? 太郎は花子ノおとしアメリカで書いた論文に目を通した

c ?? 太郎は花子ノおとしアメリカのイリノイ大学で書いた論文に目を通した

d * 太郎は花子ノおとしアメリカのイリノイ大学で言語学博士号の為に書いた論文に目を通した （牧野 1980 : 183）

(18) d においてノは許容されないが、しかし同じ状況でもガは許容されることが下記の例から分る。

(19) 太郎は花子ガおとしアメリカのイリノイ大学で言語学博士号の為に書いた論文に目を通した

この事実も又、「名詞—ノ」が動詞と文法関係で結ばれていない連体修飾語であることを示している。(19)が許容されるのは、「名詞—ガ」が動詞と文法関係で結ばれて節を構成している為、意味上のまとまりも明確であり、動詞から多少離れていても問題がないからである。しかし、(18)d が容認されないのは、「名詞—ノ」が動詞と文法関係がない為、離れていると意味関係の認識が難しくなるからであり、又、「名詞—ノ」が後続の名詞の修飾語である為、統語上、後続のどの名詞も被修飾語となる可能性があり、実際、意味解釈上混乱を生ずるか

らである。(pp. 19-20)

そして、「一般に言われるガ／ノ交替現象は、従って、ノの多様な意味用法の一部がガの用法と重なっているにすぎないだけの現象であると言える」(p. 24)と結論づけている。

山橋(2000)の結論は以下のようである。

本稿は、ノが属格であり、これを伴う「名詞ーノ」が統語的には連体修飾語であり、ガ及び「名詞ーガ」とは、統語的にも意味用法的にも異なるものであることを主張した。そして、このことが文の構築を左右していることを示し、一般に言われているガ／ノ交替現象は、単にノの意味用法の一部がガの用法と重なっているにすぎない現象であることを示した。(中略)提案は、“one form, one meaning”の原理(Dwight Bolinger (1977) 他)にも適うものであり、また、日本語のノの機能を包括的に説明することを可能にし、日本語文法の簡略化にも繋がる。しかし、これが正しければ、ガ／ノ交替現象は文法分析に一つの課題を呈していることになる。「名詞ーノ」は「名詞ーガ」と同様、意味上は動詞とまとまってある事態を表すが、動詞と文法関係は持たず、あくまでも連体修飾語として機能している。つまり、「月ガ出る頃」の「出る」が「月ガ」と共に事態を表し、文／節を構成しているように、文／節が動詞を中心とした項のまとまりで構築されているならば、少なくともガ／ノ交替現象の関わる埋め込み文は異なる。「月ノ出る頃」の「出る」は「月ガ出る頃」の「出る」と同じ動詞であるにもかかわらず、「月ノ」と文／節を構成せず、意味関係と文法関係がそれぞれ独立している。(p. 25)

以上が山橋の主張の紹介であるが、ノ格名詞句は、主語としての機能を持

つが、主語の位置ではなく、連体修飾語の位置にあることを示唆する別の証拠を挙げよう。「さ」という音を名詞句＋助詞の後に挿入してみよう。

- (19) a. 太郎がさ、買ったさ、本をさ、捨てちゃったんだ。
b. * 太郎のさ、買ったさ、本をさ、捨てちゃったんだ。

名詞句＋「が」の主語の後には「さ」を挿入できるが、名詞句＋「の」の主語の後には「さ」を挿入できないか、あるいは、容認度が低い。そして、「さ」は、以下に見るように、連体修飾語の属格の後にも挿入できないのである。

- (20) a. * 太郎のさ、本をさ、見せてよ。
b. 太郎の本をさ、見せてよ。
(21) a. 僕の本を返してくれよ。
b. 僕の本をさ、返してくれよ。
c. * 僕のさ、本をさ、返してくれよ。

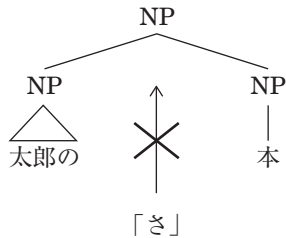
このことは、ノ格名詞句は連体修飾語の位置にあるという説を支持する証拠となる。

この考え方に対して、「が」と「を」は省略できるから「さ」を挿入できるのであると反論されるかもしれないが、省略できない助詞の場合も「さ」がつく。以下の例文では省略できない「で」と「と」という助詞の後に「さ」を挿入できる。

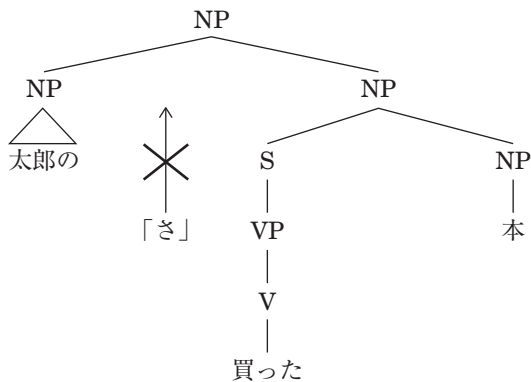
- (22) a. 太郎がさ、公園でさ、犬とさ、遊んでいたよ。
b. * 太郎、公園、犬、遊んでいたよ。
c. 太郎、本、買ったよ。

このノ格名詞句の後に「さ」が挿入できないことは、属格とその後の名詞との間の関係が、主語と他の要素との関係とは異なることを示唆し、それは、ノ格名詞句が連体修飾語であると仮定することで説明ができる。

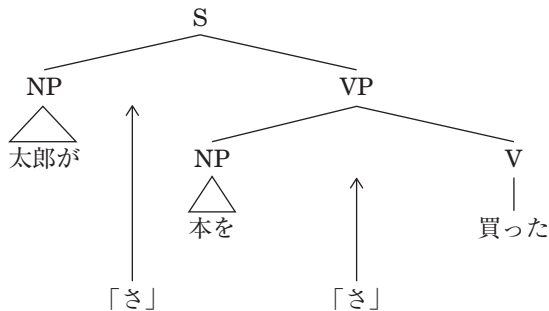
(23) a.



b.



c.



6 素性照合によるノ格の用法の説明

ノ格主語の特徴を整理しておこう。

- (24) a. ガ格主語はノ格主語の位置のすべてに現れることができるが、ノ格主語はガ格主語の位置のすべてに現れることができるわけではない。
- b. ノ格主語の使用には制約があり、関係節か名詞句補文の主語としてしか使えない。
- c. ノ格には多くの用法があり、連体節のノ格主語はノ格の多くの用法のうちの一つにすぎない。

連体節のノ格が主語を表すことがノ格の多くの用法のうちの一つにすぎないのならば、連体節の主語としてのノ格だけを説明する理論ではなく、ノ格の用法すべてを説明できる単一の理論を目指すべきである。主語としてのノ格しか説明できない理論よりは、ノ格の用法すべてを説明できる理論の方が優れているからである。

では、どのようにしてノ格のすべての用法を説明すればよいのであろうか。

初期の生成文法では、これを、変形（名詞化変形）によって説明していた。つまり、「名詞＋の」は深層構造では文である。

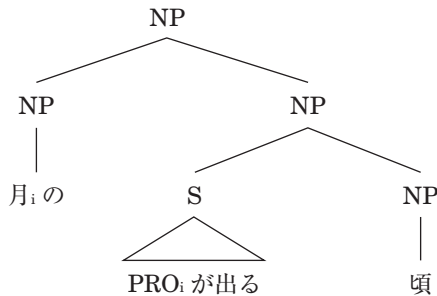
- (25) a. 次郎が太郎を描いた → 太郎の絵（太郎が描かれている絵）
 b. 太郎が本を持っている → 太郎の本（太郎が所有している本）
 c. 総理大臣である安倍晋三 → 総理大臣の安倍晋三

しかし、これでは膨大な数の変形規則が必要であり、また、現在の生成文法

の理論では、個別の構文を派生するための変形規則の存在は認めない。単純な文法を目指すのならば、この派生は採用すべきではない。

では、どのようにしてノ格名詞句を派生すればよいであろうか。まず、ノ格が連体修飾語であることを示すために、後で取り上げる山橋（2000）が紹介している三原（1994）に従って、ノ格の名詞句を元から連体修飾語の位置に置き、埋め込み節の主語の位置には抽象的な代名詞があると仮定してみよう。

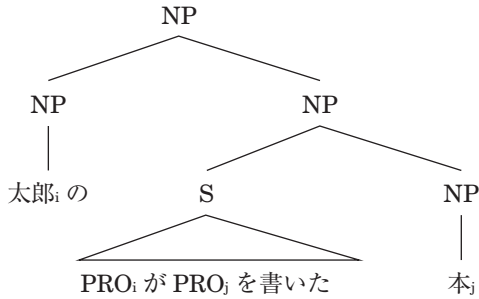
(26)



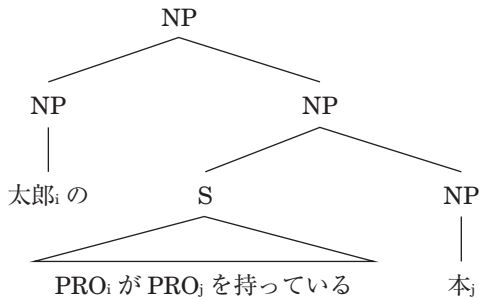
この考え方は、Miyagawa や Ochi の DP Approach に通じるものである。ただし、ノ格主語を埋め込み節から連体修飾語の位置に移動するのではなく、元々から連体修飾語の位置にあると仮定する。

また、「太郎の本」の場合は、太郎が書いた本とも、太郎が所有している本とも、解釈できるが、これも抽象的な PRO を仮定することで説明できる。

(27) a. 太郎の本 = 太郎が書いた本



b. 太郎の本 = 太郎が持っている本



しかし、この方法だと、かつての名詞化変形と同じ操作が必要になる。関係節を削除しなければならないからである。ノ格名詞句を最初から連体修飾語の位置に置いておき、抽象的な代名詞を仮定する方法では、単純な文法にはならない。その他の解決法を考えなければならない。

ヒントは、柴谷 (1978) にある。柴谷 (1978) は、二格主語 (柴谷は「与格主語」と呼ぶ) に関して次のように述べている。⁸

以上の観察で明らかのように、与格主語をとる述語は所有・可能・必要の概念を表わすものであるが、これらの観念を表わす述語総てが

与格主語をとるとは限らない。例えば、(5・エ)の「苦手だ」と意味的に同類だと考えられる「上手だ」や「得意だ」は与格主語をとらないようである。例えば、次の文は(5・エ)に比べて文法性が落ちると思われる。

- (8) ? 君に英語が, 上手な／得意な ことをすっかり忘れていた。

所有・可能・必要を表わす述語でどれが与格主語をとるかに関しては個人差があるようである。(8)の文を文法的だとする話者もあるし、非文だとする話者もある。このようなことから、どの述語が与格主語をとるかということは、一般的な意味素性(又は特徴)から規定するのはむずかしい。話者も習得過程で、これらの述語は個別に与格主語をとるかどうかを習わなければならないのではないかと考えられる。つまり、以上の例文の述語は個別に「与格主語」といった語彙的符牒を持っていると考えられる。言い換えれば、次の通りである。普通の述語は主格主語をとるが、ある特定の述語(所有・可能・必要を表わす述語の大部分)は「与格主語」という語彙的符牒を持っていて、これらが述語節に起こると、主語は与格助詞「に」の付加をうけると考えることが出来る。しかし、(8)のような文も適格とする話者の文法では「与格主語」といった気ままな語彙的符牒でなしに、「所有・可能・必要を表わす述語」といった意味素性によって問題の述語が規定されているかも知れない。(p. 224)

また、「水が欲しい」の「欲しい」のような状態を表す述語はガ格目的語をとる。柴谷(1978)は次のように述べている。

直接目的語も主語のように、「を」をとるノーマルなものと、「が」をとる特別なものがある。先に検討したように、「好き」・「わかる」・「ほしい」・「動詞＋たい」・「動詞＋（ら）れる」により代表される状態述語と共起する直接目的語は「が」をとる。（p. 236）

柴谷（1978）は、述語が〔与格主語〕や〔状態述語〕といった素性を持っている場合には、二格主語やガ格目的語が以下のような変形規則で派生されるとしている。（番号は柴谷（1978）のもの。）

(38) 主語助詞規則

- (ア) 与格主語と指定された述語と共起する主語に「に」を付加せよ。
- (イ) 主語に「が」を付加せよ。（但し、既に主語助詞規則が適用されている場合には随意的。）（p. 235）

(42) 直接目的語助詞規則

- (ア) 状態述語と共起する直接目的語に「が」を付加せよ。
- (イ) 直接目的語に「を」を付加せよ。（但し、既に直接目的語助詞規則が適用されている場合には随意的。存在の述語その他のある述語を含む文には不適用。）（p. 236）

柴谷（1978, pp. 239-240）の例を使って、柴谷の考え方を説明しよう。「太郎に英語が話せる」という文の派生である。（筆者の補足説明も加えてある。）

まず、深層構造は以下になる。「太郎に英語が話せる」は「太郎…れる」という主文に「太郎 英語 話す」という文が埋め込まれている。

- (28) [太郎 英語 話す] れる]
 主語 主語 直接目的語 与格主語
状態述語

主文の主語の「太郎」と埋め込み文の主語の「太郎」は同一人物を指すので、同一名詞句削除規則という変形規則で、埋め込み文の主語の「太郎」は削除される。そして、述語繰り上げ規則という変形規則で、埋め込み文の述語の「話す」が主文に繰り上げられ、「れる」と一緒になって「話せる」という可能動詞となる。結果が以下のようなものである。

- (29) [太郎 英語 話せる]
 主語 直接目的語 与格主語
状態述語

「話せる」という複合動詞は可能動詞であるので、[与格主語]と[状態述語]という語彙的特徴（素性）を持つ。

この構造に主語助詞規則と直接目的語助詞規則を適用する。

- (30) 太郎 英語 話せる
 与格主語
状態述語

↓主語助詞規則（(ア)が適用される）

太郎に 英語 話せる

↓直接目的語助詞規則（(ア)が適用される）

太郎に 英語が 話せる

ニ格主語とガ格目的語を持つ文の派生を動詞の素性で分析する方法は、三

原(1994)でも提案されている。三原(1994)も、「どの述語がどの格パターンを取るかについては、述語ごとにレキシコンで指定しておく他はないのである」と言っている。三原(1994)から引用しよう。(例文番号は三原(1994)のもの。)

このような雑多な文法性を露呈する文例を前にする時、シンタクスによって格の交替を説明しようとする試み(例えば Takezawa (1987) の二重分析 (coanalysis), あるいは井上(1989)の編入に基づく分析等)は、いずれも無力であると言わざるを得ない。そもそも格の交替に関する記述的一般化が不可能だからであり、記述的一般化が達成されない時、いかなる理論化もあり得ないからである。さらに、与格主語は状態述語文に現われると言っても、全ての状態述語文が与格主語を許容する訳ではない。「欲しい」や「好きだ／嫌いだ」、あるいは願望の「～たい」等は、目的語のガ標示は許すが、主語のニ標示は拒絶する。

- (93) a. 僕が／＊に花子が好きな(こと)。
- b. 僕が／＊に水が欲しい(こと)。
- c. 僕が／＊にコーヒーが飲みたい(こと)。

これらにおいて目的語にヲが可能かどうかは語彙項目によって、あるいは世代によっても判断が違って来るようである。筆者の判断を示しておこう。

- (94) a. ＊ 僕は花子を好きだ。
- b. ＊? 僕は水を欲しい。
- c. ? 僕はコーヒーを飲みたい。

総括しよう。結局のところ、どの述語がどの格のパターンを取るかについては、述語ごとにレキシコンで指定しておく他はないのである。(p. 139)

一般化ができない時には、語彙項目ごとに個別にその特性を記述することになる。そこで、柴谷（1978）や三原（1994）に従って、動詞がどのような主語や目的語をとるかが語彙目録で語彙的特徴（つまり、素性）によって決められていると仮定する。たとえば、柴谷（1978）に従えば、二格主語とガ格目的語をとる動詞は「＋二格主語」と「＋ガ格目的語」という素性を持つと仮定するのである。

この考え方は、すでに、三原（1994）にある。三原（1994）は、第1章の4.3節の「属格の付与」の中で、「村田さんのゴッホのひまわりの絵」という句に関して、次のように述べている。（【 】で囲った部分は、三原ではなく、筆者による注である。）

「絵」は漢語サ変動詞系名詞【漢語サ変動詞系名詞とは、三原（1994, p. 37）によれば、「研究する」からスルを落として派生した「研究」のような名詞のことである】ではないが、背後に何らかの動作が感じられる名詞である（太郎が著者である場合の「太郎の本」等も同様）。従って「ゴッホ」はある種の動作主、「ひまわり」は絵を描くという動作に対する目的語、そして「村田さん」はその絵の所有者と解釈出来るであろう。（p. 38）

この考え方を採用すると、属格と動詞、あるいは、属格と名詞との間で素性照合がされるという方法でノ格名詞句のいろいろな意味を説明できるのではないであろうか。柴谷（1978）は変形規則を使っているが、現在では、変形規則は存在しないので、照合の考え方を取り入れることになる。

たとえば、「本」という名詞は、所有者か執筆者と関係づけられなければならないという素性（これらの素性を「＋執筆者」，「＋所有者」と表記する）を持つと考える。同時に、連体修飾語の位置にある名詞（たとえば「太郎」）も、執筆者となり得るという素性（この素性も「＋執筆者」と表記す

る)と所有者となり得るという素性(この素性も[+所有者]と表記する)を持つと考える。

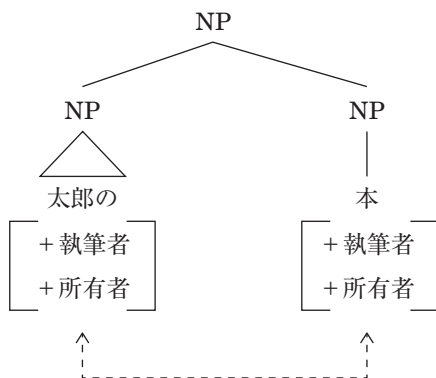
語彙情報に関して、原口他(2016)では lexical item を次のように説明している。

Lexical item (語彙項目) 極小主義プログラムにおける言語計算の基本単位。語彙項目は素性(feature)(音韻素性、意味素性、および形式素性)の集合体であって、文の統語構造の派生と解釈はその文で用いられる語彙項目の素性によって決定される。派生の中で LF 表示に至る派生では、包括性の条件(inclusiveness condition)によって、語彙項目に含まれている情報以外いかなる情報も付け加えることは禁じられる。このため、言語計算によって形成される統語対象(syntactic object)(句構造)は語彙項目からなる集合によって表示される(中略)。その帰結として、語彙項目は適切な LF 表示を生み出すのに必要なすべての情報を含んでいなければならないと言える。また、派生における移動の動因は、移動される要素と移動先の要素それぞれの主要部である語彙項目が含む素性の相互作用として説明される。(p. 611)

「本」という語彙項目が持つ、所有者か執筆者と関係づけられなければならないという素性も、「太郎の本」という構造の意味解釈にとって必要な情報であり、「本」という語彙項目に含まれていなければならない情報であると考えるのである。

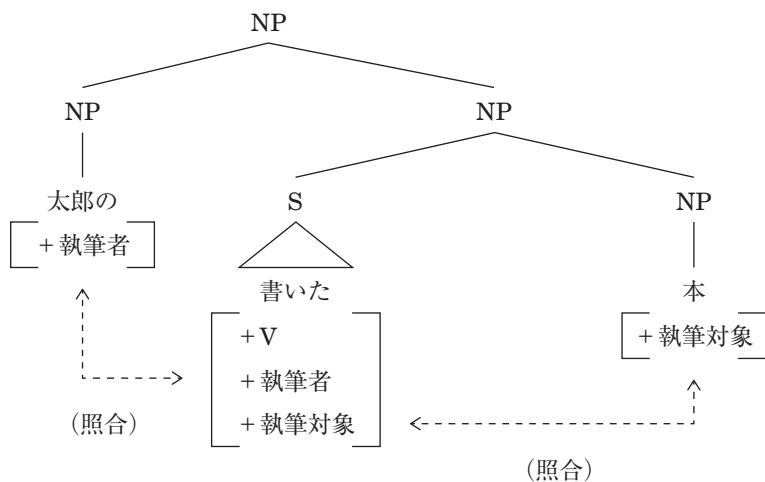
そして、連体修飾語の位置にある名詞の素性と主要部の名詞の間で素性照合が行われ、素性が一致すれば、「太郎が書いた本」とか「太郎が持つ本」という解釈ができることになると考えるのである。⁹

(31)



では、「太郎の書いた本」はどのような構造をしているのでしょうか。考えられる一つの構造は以下のようなものである。

(32)



「書く」という動詞は執筆者が必要という素性（この素性も [+執筆者]

と表記する)を持ち、その素性が「太郎」という名詞が持つ「+執筆者」という素性と照合されることになる。また、「書く」という動詞は執筆対象が必要という素性(この素性を「+執筆対象」と表記する)を持ち、その素性が「本」という名詞が持つ執筆されるものという素性(この素性も「+執筆対象」と表記する)と照合されることになる。

この分析では埋め込み節に PRO の存在は仮定していないが、山橋(2000)は、連体節の中に空所があるという三原(1994)の説を紹介し、批判している。(例文番号は山橋(2000)のもの。)

又、三原(1994)にあるように、「名詞ーノ」を連体修飾語とした際に、もう一つの分析の可能性として考えられる下記の(22)に見られるような構造とも異なる。(22)では動詞の意味役割を担う項の存在を想定する空所(gap)があり、節の埋め込みがある。

(22) [名詞句 [名詞ーノ]] [名詞句 [節 Ø [動詞]]] [名詞]] (Øは空所を示す)

表面上ガ／ノ交替が可能に見えるのは、「名詞ーノ」が「名詞ーガ」と動詞との意味関係を共有するからであるが、このことが動詞の意味役割を持つ項の空所の想定を拒否し、(22)が当該の現象の構造としては妥当ではないことを示しているし、又、経験的にも証明される。例えば、

(23) a 健ガ描いた絵 b 健ノ描いた絵

の例においては(23)aも(23)bも同様に解釈できる。しかし、(23)bの「健ノ」のあとに「健ガ」の顕在する、

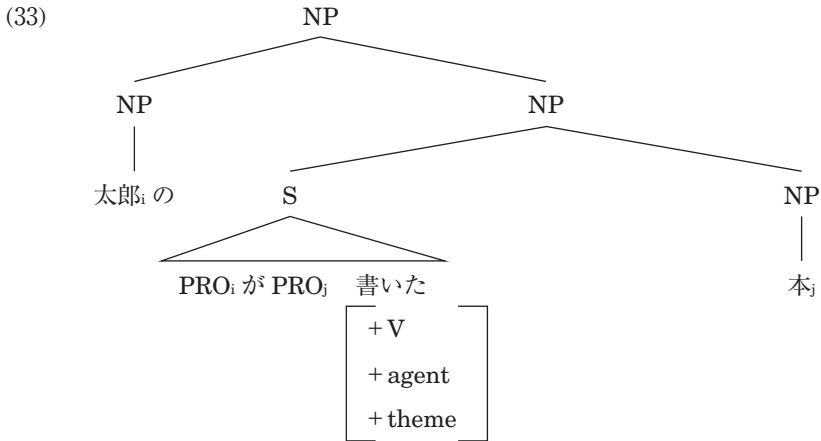
(24) [健ノ [[健ガ描いた] 絵]]

は(22)と同じ構造を有するが、上記の(23)bとは意味が異なる。(23)bは、(23)a同様、「健」が描き手であることのみを表すが、(24)は「健」が描き手であること以外に、「健」が「絵」の持ち主あるいは対象であることをも意味する。同様に

- (25) a 健ノ生まれた家 b 健ノ健が生まれた家

において, (25)a の意味は, (22) の構造を持つ (25)b の意味とは異なる. (25)a は「健が生まれた家」と同じ意味, 即ち「家」が「健の生まれた場所」であることのみを表すが, (25)b の場合, 「家」が「健の生まれた場所」であることを表すのみならず, 「健」がその「家」の所有者あるいは居住者であることをも意味している. (pp. 20-21)

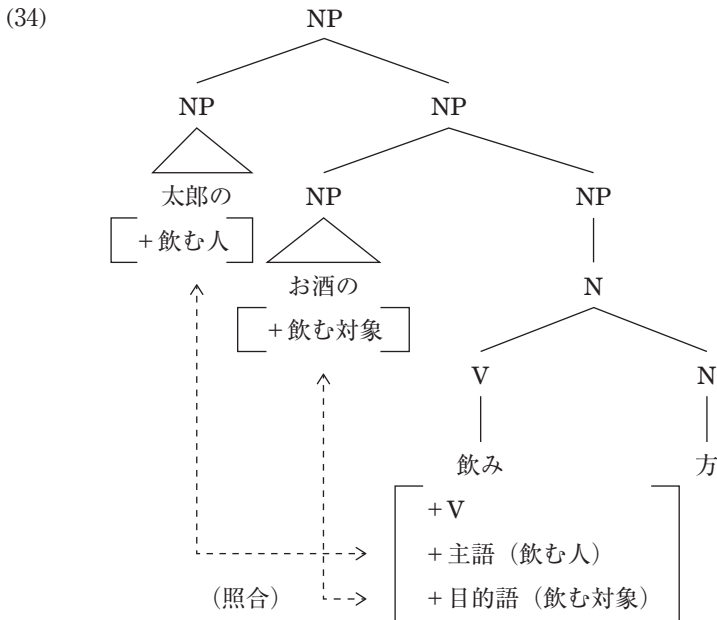
山橋 (2000) は, この三原 (1994) の説は妥当ではないと批判しているが, もし埋め込み節に三原 (1994) が主張するように, 空所 (つまり PRO) が存在すると仮定すると, 次のような構造が考えられる.



項に対する意味役割の付与に関しては, 「書いた」という動詞は agent という意味役割を主語の PRO に付与し, 「太郎」は PRO_i と同一指標を持つので, 「太郎」は agent という意味役割を持つことになる. しかし, この派生には余剰性がある. 「書いた」という動詞の [+ agent] (つまり [+ 執筆者]) という素性は, 属格の「太郎」が持つ [+ 執筆者] という素性と直接

照合すればよいからである。¹⁰

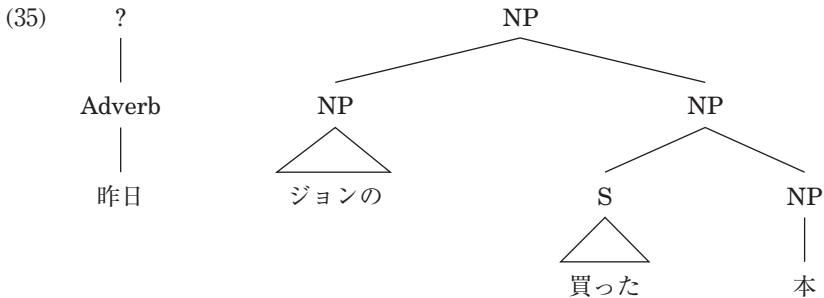
もう一つ、「太郎のお酒の飲み方」という例を検試してみよう。動詞の「飲む」もその連用形の「飲み」も、その語彙的特徴として、主語として飲む人が、目的語として飲む対象が必要という素性を持っているとしておく。そしてノ格の名詞句と動詞の連用形である動詞派生名詞（「飲み」）の間で素性の照合をするのである。下図は、「太郎のお酒の飲み方」における素性照合を示したものである。



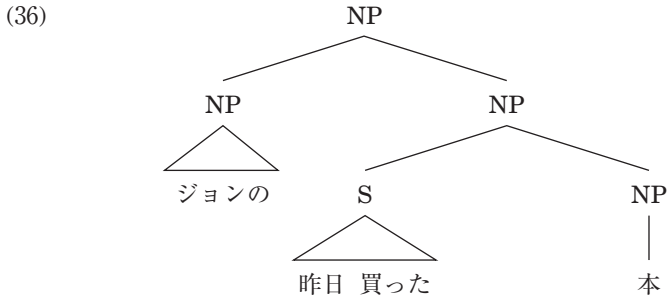
「飲む」という動詞は項を2個必要とし、主語に飲む人を、目的語に飲む対象を取る。この「飲む」という動詞が名詞化された時（連用形）にもこの項構造は保たれており、「飲み方」という名詞でも、飲む人と飲む対象が必要である。そして、「太郎」は飲む人となり得る名詞であるので、「飲み」の

[+主語 (飲む人)] という素性は照合されるし、「お酒」は飲む対象になり得る名詞であるので、「飲み」の [+目的語 (飲む対象)] という素性も照合される。¹¹

このように、ノ格名詞句の用法すべてを説明するために、ノ格名詞句は連体修飾語の位置にあるとしても、Nakai (1980) で提示された「昨日ジョンの買った本」の「昨日」の位置が宙ぶらりんになるという問題は解決されないように見える。



しかし、句や文の階層構造がどの段階やレベルで表示されるかを考慮すると、まだ十分には検討してはいないが、この問題は解決できるように思える。発話された句や文は単に語が一行に並んでいるだけで階層構造はないと考えるのである。¹² 句や文が階層構造を持つのは、発話される前、あるいは、発話された句や文を聞いて脳内にその構造が構築され解釈される時である。つまり、「昨日ジョンが買った本」という句は、発話された段階では、単に、「昨日」+「ジョンが」+「買った」+「本」という語が線上に並んだものにすぎないが、この句を聞いた段階でその構造の脳内表象 (mental representation) が構築されると、その構造が以下になると考えるのである。この句を聞いて解釈する時に、「昨日」は「買った」という動詞を修飾する副詞なので、埋め込み節に入れただけなのである。



この句を発話する場合は次のようになる。脳内表象でこのように階層構造で表示された句を声に出して発話するときに、「昨日」を「ジョンの」の前に置いただけなのである。¹³

発話された句や文の線状的構造とその句や文の意味的な構造が異なることは、abnormal psychologist の構成構造を見ればよく理解できる。abnormal psychologist の構成構造は、音韻論的には (37a) であるが、意味的には (37b) である。

- (37) a. [[abnormal] + [psychologist]]
 b. [[abnormal] + [psychology] + ist]

どのレベルで句や文の階層構造が表示されるのかを考慮すれば、Nakai (1980) が提示した反例は問題とはならない。

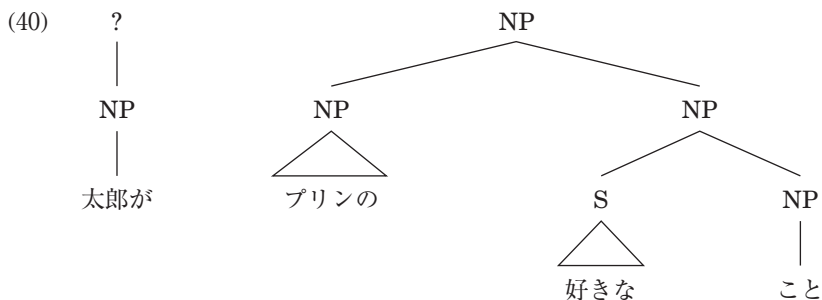
Saito (2004) も反例と思われる例を挙げているので、それも同じように説明してみよう。(38) が Saito (2004, p. 104) が挙げている例である。(原文はローマ字表記。)

- (38) 太郎が／の プリンが／の 好きなこと

Saito (2004, p. 104-105) は、この例では、ガとノの組合わせとして以下の四つが考えられるとしている。

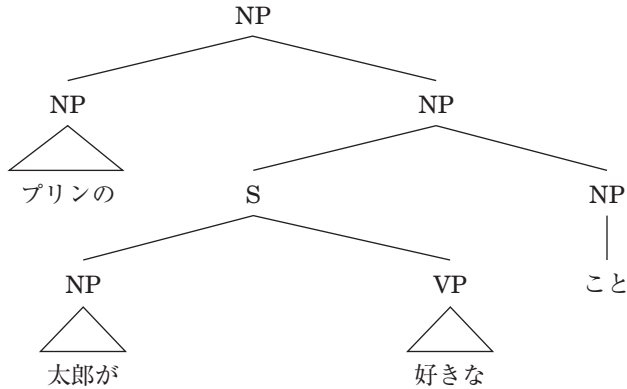
- (39) a. 太郎がプリンが好きなこと
 b. 太郎がプリンの好きなこと
 c. 太郎のプリンが好きなこと
 d. 太郎のプリンの好きなこと.

(39b) の場合、「太郎が」の位置が宙ぶらりんになる。



これも脳内表象では次のような構造をしていると考えれば説明はつく。

(41)



発話された時に「太郎が」が「プリンの」の前きただけである。

7 助詞の交替現象の統一的説明を求めて

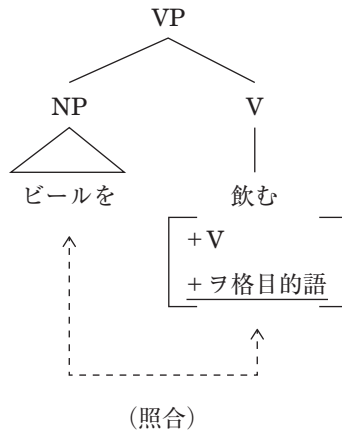
ノ格主語はノ格の用法の一つであるという観点からノ格主語の派生を単純に説明できる分析を提案したが、それだけでは十分ではない。助詞の交替現象は、ガ格とノ格だけではなく、ヲ格とガ格、ガ格とニ格の間でもある。より優れた分析は、ガ・ノ交替、ヲ・ガ交替、ガ・ニ交替のすべてを統一的に説明できるものである。その統一的な分析が可能かどうか検討してみよう。

まず、ヲ格とガ格の交替を見てみよう。

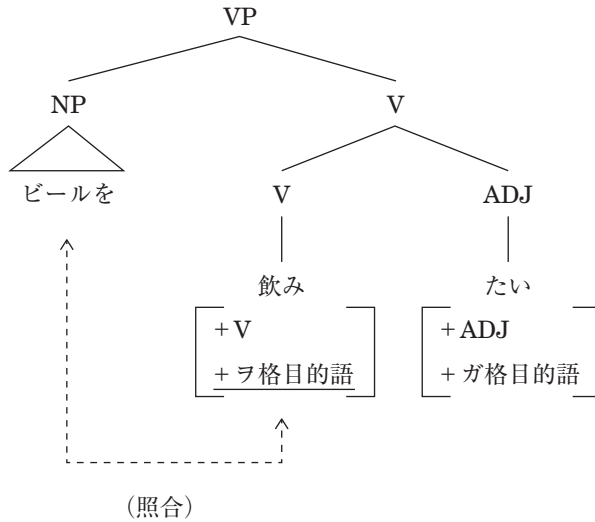
- (42) a. ビールを飲む季節になった。
 b. ビールを飲みたい季節になった。
 c. ビールが飲みたい季節になった。
 d. 英語を話す人は大勢いる。
 e. 英語を話せる人は大勢いる。
 f. 英語が話せる人は大勢いる。

ガ格目的語が使えるのは, Kuno (1973, Chapter 4) が指摘するように, 動詞が〔状態述語〕の時である。「飲む」自体には〔状態述語〕の素性はなく, ヲ格目的語を取るが, 複合動詞を作る「たい」は形容詞で〔状態述語〕の素性を持つので, 複合述語の「飲みたい」はガ格目的語を取る。すると, 上の例文の構造として以下のような構造を仮定して素性の照合を行うことになる。¹⁴

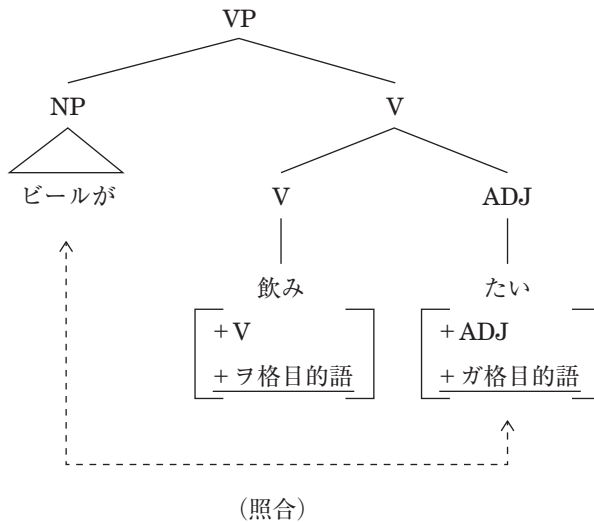
(43) a. 「ビールを飲む」の解釈



b. 「ビールを飲みたい」の解釈

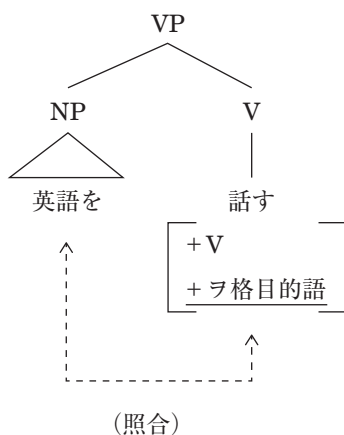


c. 「ビールが飲みたい」の解釈

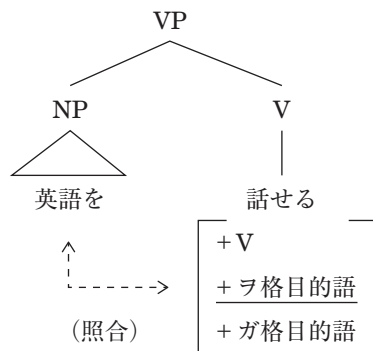


例文 e と f は可能動詞を持つ文である。可能動詞は、[+ヲ格目的語] と [+ガ格目的語] の二つの素性を持つと仮定する。そうすると、例文 d, e, f の動詞句の構造と素性の照合は以下ようになる。

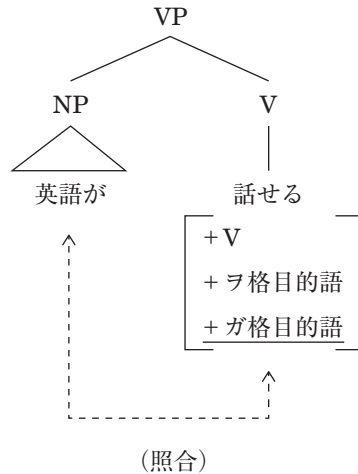
d. 「英語を話す」の解釈



e. 「英語を話せる」の解釈



f. 「英語が話せる」の解釈



次に、ガ格主語とニ格主語の交替も検討しよう。以下の例文を見てみよう。

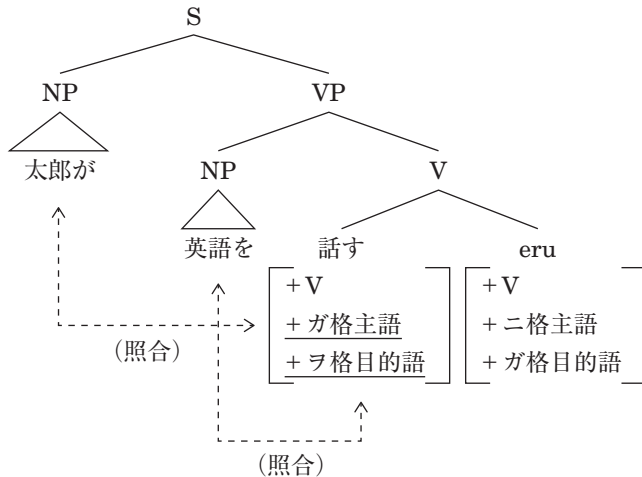
- (44) a. 太郎が英語を話せることを知っていますか.
 b. 太郎が英語が話せることを知っていますか.
 c. 太郎に英語が話せることを知っていますか.
 d. ?太郎に英語を話せることを知っていますか.

「話せる」は「話す」という動詞と「eru」という動詞からなる複合動詞と見なす。そして、「話す」には[+ガ格主語]と[+ヲ格目的語]という素性があり、「eru」には[+ニ格主語]と[+ガ格目的語]という素性がある。すると、複合動詞である可能動詞の「話せる」には、[+ガ格主語]と[+ニ格主語]という素性があると仮定できる。

例文(44a)の「太郎が英語を話せる」の部分の構造と素性照合は以下のよ

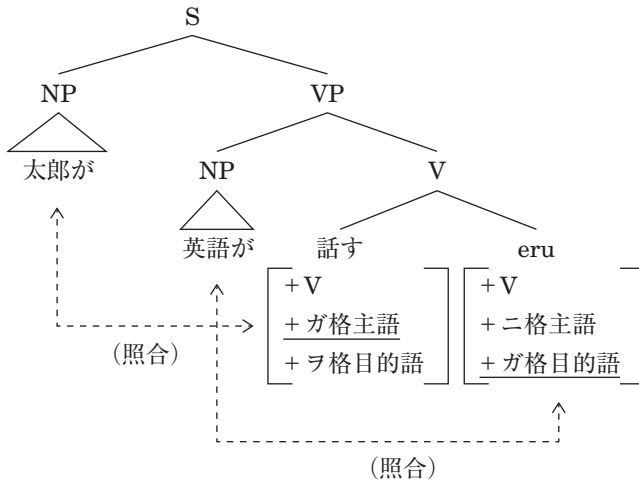
うになるであろう。「太郎」と「話す」の間でガ格主語の照合が行われ、「英語」と「話す」の間でヲ格目的語の照合が行われる。

(45)



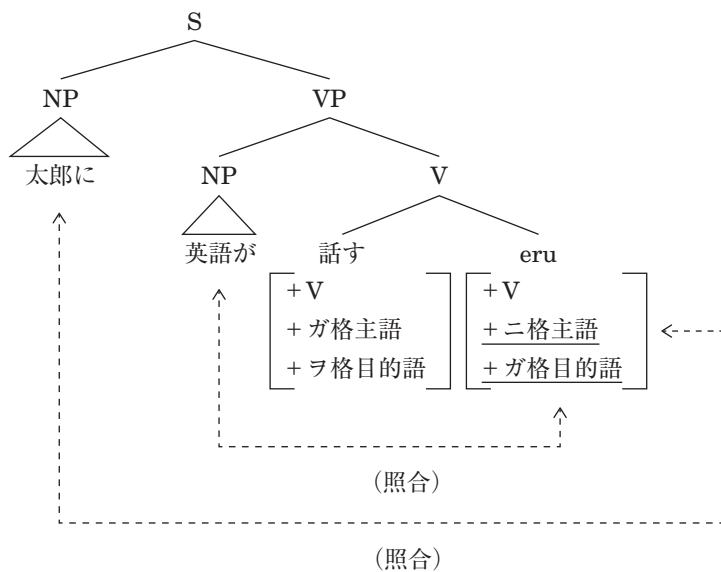
例文 (44b) の「太郎が英語が話せる」の場合は、「太郎」と「話す」の間でガ格主語の照合が行われ、「英語」と「eru」の間でガ格目的語の照合が行われることになる。

(46)

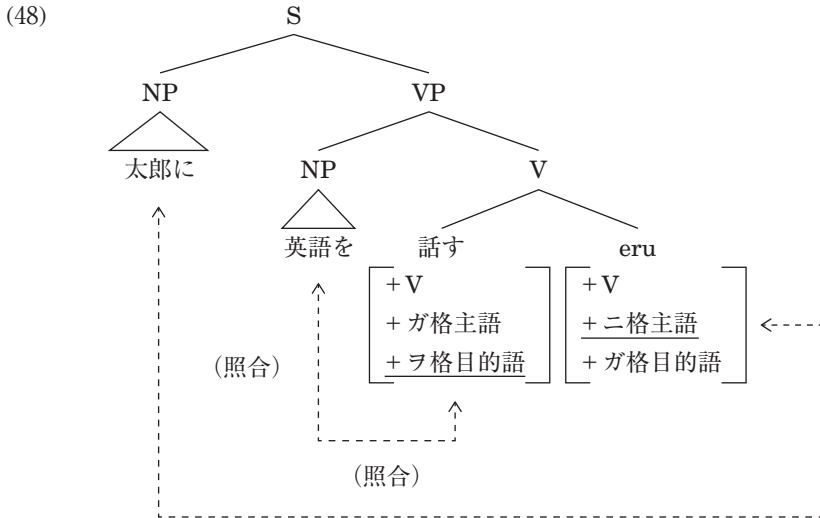


例文 (44c) の「太郎に英語が話せる」の場合は, 「太郎」と「eru」の間で二格主語の照合が行われ, また, 「英語」と「eru」の間でガ格目的語の照合が行われることになる。

(47)



例文 (44d) の場合は, 「太郎」と「eru」の間でニ格主語の照合が行われ, 「英語」と「話す」の間でヲ格目的語の照合が行われることになる.



このように、素性照合によって、ガ・ノ交替以外の助詞の交替現象も説明できる。したがって、素性照合による助詞の交替現象の分析は、ガ・ノ交替のみを説明する分析よりも優れていることになる。

8 まとめ

本稿は、まず、ガ・ノ交替現象の過去の研究を振り返り、その後、DP Approach と Non-DP Approach のような、主語であるノ格名詞句の属格がどの要素によってどのように認可されるかの分析ではなく、ノ格名詞句の連体節における主語としての用法は、ノ格名詞句の多くの用法の一つにすぎないという観点から、元々から連体修飾語の位置にあるノ格名詞句が素性照合によって認可されるという提案を行った。そして、素性照合による分析は、他の助詞の交替現象も統一的に説明できることを確認した。

しかしながら、本稿は、あくまでも、こういう考え方もできるのではない

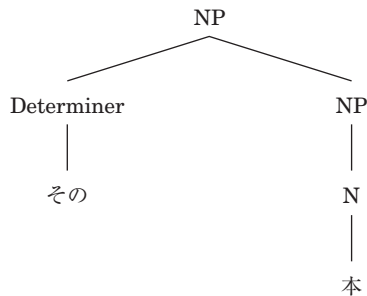
かという試論である。素性照合の具体的手順も提示していないし、素性照合によって、国立国語研究所の報告書に記載されているノ格名詞句のすべての意味・用法が説明できるのかなど検討すべきことも残されている。査読者の一人からも指摘されているが、素性といっても、文法的な素性もあれば、意味的な素性もあり、様々な素性があり、それらを区別して扱わなければならないであろう。しかし、本稿では一括りにして単に素性として処理している。このように、論文としては未完成であることは承知しているが、今後のガ・ノ交替現象の研究に何らかの貢献ができるのではないかと思います、研究ノートとして、ここにこの試案を公表した次第である。¹⁵

謝辞

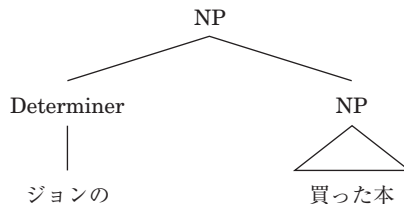
本稿の最終稿を完成させるにあたっては、『主流』の二名の査読者のコメントが大変参考になった。両氏に御礼を申し上げる。アドバイスに従って加筆修正した部分もあるが、筆者の判断で、アドバイスに従わなかった部分もある。

註

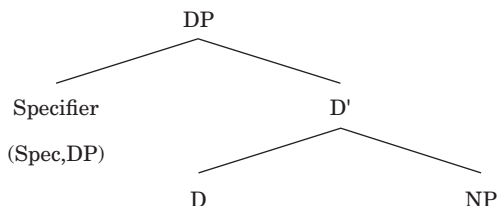
- 1 第2節の「ガ・ノ交替現象とは」のここまでの部分は、日本言語学会第137回大会（2008年金沢大学で開催）における「日本語におけるガ・ノ交替現象」というワークショップで発表したものである。（予稿集 p. 104）
- 2 「ジョンの買った本」の「ジョンの」という属格名詞句が樹形図のどの位置にあるかに関しては、理論によって考え方が変わるであろう。古典的な樹形図で、「その」が *determiner* であるとする、「その本」の樹形図は以下のようになる。



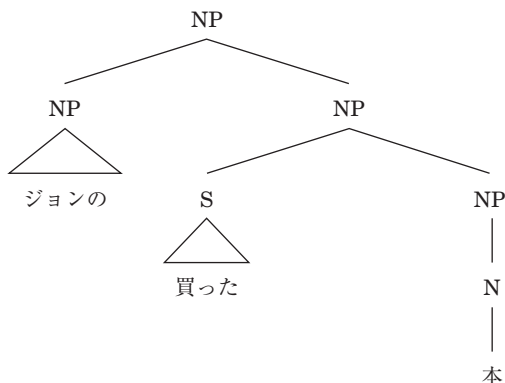
「ジョンの」が同じく *determiner* と仮定すると、「ジョンの買った本」の樹形図は以下のようになるであろう。



現在の理論では、DP Hypothesis を採用しているので、このような樹形図は想定しない。（DP Hypothesis に関しては、Abney (1987) 等を参照。）NP は DP (Determiner Phrase) の補部である。



しかし、本稿では、Bedell (1972) に倣って（本文の (2b) の樹形図を参照）、以下のような樹形図を使用することにする。



- 3 ガ・ノ交替現象の先行研究を整理した他の文献としては、筆者が目を通した範囲では、菊田 (2002) と越智 (2016) がある。菊田 (2002) は、主辞駆動型句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar) によるガ・ノ交替現象の分析である。

また、ガ・ノ交替現象の分析には Cartography 理論に基づくもの（たとえば、赤楚 と 原 口 (2011), Akaso & Haraguchi (2011), Yoda (2011), Yoda & Nambu (2011) など）もあるが、本稿では、Cartography に基づく分析は取り上げない。

- 4 gapless clause というのは次の例で代表されるように、埋め込み文に head noun と対応する空所 (gap) (PRO と考えてもよい) がない節である。「可能性」と対応する空所や PRO は埋め込み節には存在しない。

[[ルビーか真珠が／の安くなる] 可能性]

通常の関係節では、head noun に対応する空所がある。

[[PRO_i ルビーか真珠を買いたい] 人_i]

- 5 Maki & Uchibori (2008) が言及している (15a) は次のような文である。Maki & Uchibori (2008, p. 198) から引用する。(英語のグロスを省略する。)

- (15) a. [kono kompyuutaa-ga keesan-sita] [[rubii-ka sinzyu]-no kotosi yasuku-naru] kananoosee
 i. 'the probability [that rubies or pearls become cheap this year] [which this computer calculated]'
 ii. (?) '[the probability that rubies become cheap this year] or [the probability that pearls become cheap this year]] [which this computer calculated]'

Maki & Uchibori (2008) は、Ochi (2001) の説明を次のように解説している。

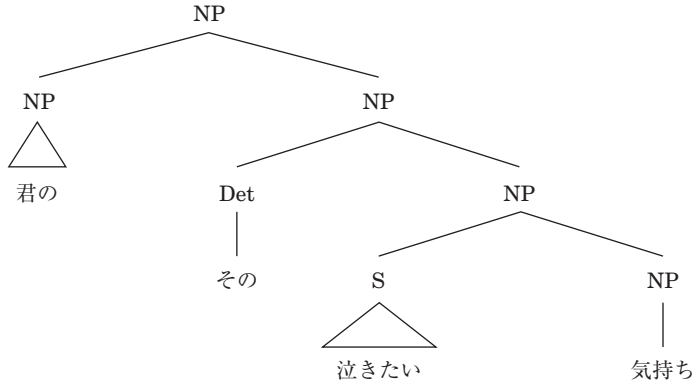
Ochi (2001) reports that, although (15a) has two readings—namely, the in-situ and raising readings—(15b) only has the raising reading. The fact that (15a) is ambiguous is readily explained under Ochi's approach, because in (15a), the genitive subject *rubii-ka sinzyu* 'ruby or pearl' is either in Spec,DP or within the sentential modifier in overt syntax, and the former case yields the raising reading, and the latter case the in-situ reading. (p. 198)

- 6 C_{affix} は affixal C のことである。Maki & Uchibori (2008) は次のように説明している。

Hiwaira [sic] hypothesizes that C in Japanese relative clauses is null and affixal and that the affixal C requires an Agree relation with the T-(v)-V to circumvent the situation where the affixal C is left stranded. (p. 201)

[ϕ] は ϕ -feature のことである。

7 (15b)の構造は次のようにならざるをえない。

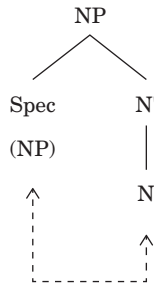


「その」が「泣きたい気持ち」という名詞（句）を修飾する決定詞（determiner）であるならば、「君の」は「その泣きたい気持ち」という名詞句を修飾する連体修飾語である。（Bedell（1972）でも、「月の」は、「出る頃」という名詞句を修飾する連体修飾語である。）しかし、【筆者の本文の】（17）で示した構造では、ノ格名詞句は埋め込み節の主語の位置にあったのであるから、山橋の主張には混乱がある。

山橋（2000）の主張に混乱があることは、山橋（2000）の第4節の「さいごに」を読むとはっきりする。山橋（2000）は、第4節の「さいごに」で、「『月ノ出る頃』の『出る』は『月が出る頃』の『出る』と同じ動詞であるにもかかわらず、『月ノ』と文／節を構成せず、意味関係と文法関係がそれぞれ独立している」（p. 25）と述べているので、「月が出る」は節ではないことになる。これは、山橋（2000）が【山橋（2000）の】（13）で示した構造とは異なる。

8 (5・エ)の文は、「僕に英語が苦手なことを忘れたのかい。」（p. 223）である。

- 9 これらの feature の照合は、Specifier-Head Agreement（主語と Infl の間の、人称・数・性的一致のこと；Spec-Head Agreement と略す）のようなものと言えるかもしれない。



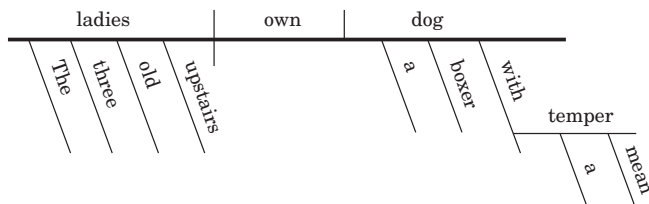
- 10 theme という意味役割は PRO_i に付与されるが、この意味役割は「本」には与えられない。「本」の意味役割は上の節の動詞が与えるからである。もし上の節の述語が「恐ろしい」で、「太郎の書いた本は恐ろしい」という文では、「本」が持つ意味役割は theme ではなく、cause のようなものである。もし PRO_i の theme という意味役割が「本」にコピーされると、「本」は theme と cause という二つの異なった意味役割を持つことになってしまい、 θ -Criterion 違反となる。
- 11 名詞にいろいろな意味的特徴があるとする、かなりの数の素性を設定しなければならぬように思えるが、そうではない。余剰規則で説明できる。たとえば、[+執筆者] と [+所有者] は [+ Human] から導ける。[+ Human] → [+執筆者]、[+ Human] → [+所有者] という余剰規則がある。
- 12 Berwick (2017) に次のような説明がある。

Plainly, linear order is imposed solely for externalization, that is, speech or sign. (p. 93)

- 13 ただし、発話する時に語を線状に並べるだけといっても、並べ方には何らかの制約が必要である。何の制約もないと、「昨日 本 買った ジョンの」といった不適格な句が発話されてしまうからである。この問題に関しては今後検討する必要があるが、生成文法のような樹形図で表示できる文の階層構造を前提としている限り解決は難しいかもしれない。筆者は、文構造の脳内表象として階層構造以外の表示

の仕方を考えてみてはどうかと思っている。そのことを少し説明しよう。

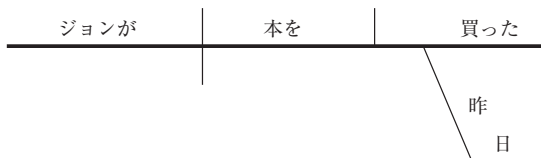
筆者が検討してみてもどうかと思うのは、Reed and Kellogg Diagram である。これは、Alonzo Reed and Brainerd Kellogg の *Higher lessons in English* (出版社は不明) で紹介されている文の分析法で、Gleason (1965) で詳しく解説されているものである。たとえば、The three old ladies upstairs own a boxer dog with a mean temper という文の構造は次のように表示される。



(Gleason 1965, p. 142)

太線の上に、主語と動詞と目的語という主要要素があり、それぞれの主要要素を修飾する要素は、その主要要素の下に置かれる。

この分析法に従うと、「ジョンが昨日本を買った」という文の構造は以下のようになるであろう。

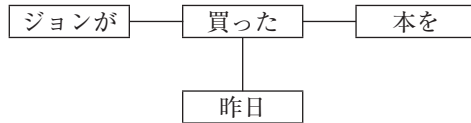


発話する時には、語を順 (linear) に並べなくてはならないが、その時には、「昨日」は、「ジョンが」の前でも、「本を」の前でも、「買った」の前でもよい。

- 昨日 ジョンが 本を 買った。
- ジョンが 昨日 本を 買った。
- ジョンが 本を 昨日 買った。

脳内表象では、語順は指定されていないという考え方もできる。この考え方は、

格文法に基づくものである（格文法に関しては、Fillmore（1968）などを参照）。文構造の脳内表象では、語は線状（linear）に並んでいるのではなく、分子構造のモデルのように、動詞が中心要素であり、項（argument）が動詞と手をつなぎ合っているような構造を考えることができる。



文を発話する時に、日本語ならば、「主語 - 目的語 - 動詞」という順序で語を並べなければならないという制約に従うだけである。

実は、Chomsky（1995）が、Chapter 4 の Order というタイトルの 4.8 節で、Minimalist Program の理論における語順の問題を論じており、語順が決められるのは音韻部門であり、Morphology の出力に対して語順を決める操作が適用されるのであると述べている。

Nothing has yet been said about ordering of elements. There is no clear evidence that order plays a role at LF or in the computation from N [numeration] to LF. Let us assume that it does not. Then ordering is part of the phonological component, a proposal that has been put forth over the years in various forms. If so, then it might take quite a different form without affecting C_{HL} if language use involved greater expressive dimensionality or no sensorimotor manifestation at all.

It seems natural to suppose that ordering applies to the output of Morphology, assigning a liner (temporal, left-to-right) order to the elements it forms, all of them X^0 s though not necessarily lexical items. If correct, these assumptions lend further reason to suppose that there is no linear order in the $N \rightarrow LF$ computation, assuming that it has no access to the output of Morphology. (pp. 334-335)

この後、Chomsky は Kayne の Linear Correspondence Axiom を論じているのであるが、その詳細は省略する。

しかしながら、このように階層構造を想定しない場合は、生成文法で重要な働きをする c-command（c-command とは constituent-command のことである）のよ

うな階層構造に基づく制約が利用できなくなってしまう。c-command とは次のように定義される制約である。

Node A c (constituent)-commands node B iff the branching node most immediately dominating A also dominates B. (Reinhart, 1983, p. 18)

ただし、c-command のような階層構造に基づく制約は不自然であるという Bouchard (2013) のような主張もある。英語の再帰代名詞は先行詞に c-command されていなければならないという制約が生成文法にはある。(anaphor とは再帰代名詞や each other のような相互代名詞のことである。)

Anaphor Binding Condition

An anaphor must be bound by a local antecedent which c-commands the anaphor. (Radford, 2016, p. 149)

Bouchard (2013) は、c-command がなくても、語用論的条件、あるいは、推論によって再帰代名詞の使用は説明できると述べている。(引用文中の Conceptual Structure は、Culicover & Jackendoff (2005) が提案しているものである。また、C&J は、Culicover & Jackendoff (2005) のことである。)

However, no Conceptual Structure counterpart of c-command seems to be at work in examples like (43): the antecedent does not c-command the reflexive (unless ad hoc structure is introduced in the Conceptual Structure by means of tricks that C&J strongly reject in syntax). This is further confirmed by examples as in (51), where the antecedents *John* and *Mary* are embedded in non-c-commanding positions (from Pesetsky 1990).

- (51) a. These rumors about himself caught John's attention.
- b. The rumors about herself made Mary's hair stand up.

Structural accounts, whether in syntax or Conceptual Structure, are highly unnatural for these cases, whereas an analysis based on discourse notions provides a general and natural account of the facts. These facts appear to depend on pragmatic/inferential conditions rather

than syntax or Conceptual Structure. (pp. 271-272)

(43) の例は以下のようなものである。

- (43) a. Another picture of himself in the paper and Susan thinks John will definitely be offended. (C&J's (20e): 482)
 b. Another picture of him(*self) in the paper and Susan divorces John. (C&J's (20b))

(Bouchard, 2013, p. 268)

もちろん, Bouchard (2013) が想定している文法理論では c-command は必要がないかもしれないが, Bouchard (2013) の文法理論は Chomsky の文法理論とは異なるものなので, 一概に c-command は不要であるとは言えないであろう。

- 14 ここでの「ビールが飲みたい」の派生は柴谷 (1978) のものとは異なる。柴谷 (1978) の例を紹介しておこう。(筆者の補足説明も加えてある。) 柴谷 (1978) は, 「僕が水が飲みたい」と「僕が水を飲みたい」を以下のように派生する。(柴谷, 1978, p. 238) すべて変形規則を使って派生される。

| | | | | |
|----|----|-------|-----|--------|
| [僕 | [僕 | 水 | 飲む] | たい] |
| 主語 | 主語 | 直接目的語 | | [状態述語] |

同一名詞句削除規則で埋め込み節の主語の「僕」を削除する

↓ 述語繰り上げ規則で「飲む」という埋め込み節の動詞を繰り上げ, 主節の「たい」と結合し, 「飲みたい」という複合述語にする

| | | |
|----|-------|--------|
| [僕 | 水 | 飲みたい] |
| 主語 | 直接目的語 | [状態述語] |

↓ 主語助詞規則 (イ) の適用

| | | |
|-----|-------|--------|
| [僕が | 水 | 飲みたい] |
| 主語 | 直接目的語 | [状態述語] |

↓ 直接目的語助詞規則 (ア) の適用

| | | |
|-----|-------|--------|
| [僕が | 水が | 飲みたい] |
| | 直接目的語 | [状態述語] |

ここで派生が終わると「僕が水が飲みたい」となる。

さらに、直接目的語助詞規則（イ）を適用すると、直接目的語は、次のように、「水がを」となる。

| | | |
|-----|------------|--------|
| [僕が | 水が | 飲みたい] |
| | 直接目的語 | [状態述語] |
| | ↓ | |
| [僕が | <u>水がを</u> | 飲みたい] |

この構造に、本稿では紹介しなかった「他の助詞に直接先行する助詞を消去せよ」という助詞消去規則（柴谷, 1978, p. 235）を適用すると、「水がを」の「を」に先行する「が」が消去され、「僕が水を飲みたい」という文が派生される。

| | | |
|-----|-------------|-------|
| [僕が | <u>水がを</u> | 飲みたい] |
| | ↓ 助詞消去規則の適用 | |
| [僕が | 水を | 飲みたい] |

- 15 本稿を『主流』編集部に提出した後で、Bouchard (2013) に以下のような記述があるのを見つけた。

Though C&J criticize mainstream generative grammar for introducing too many ad hoc syntactic devices, they have quite a few of their own, but in the semantic representations instead of syntax. Another instance is (54), which they claim shows that *NP's N* corresponds to several meanings of possession, agenthood, or time.

- (54) a. the professor's hat
 b. the teacher's examination of the students
 c. Monday's meeting

However, the semantic contents of the genitive Noun Phrase and of the rest of the nominal are sufficient to explain the variations in meaning of the whole, so there is no reason to assume that the semantic contribution of the syntactic structure and 's is not constant across the examples. Assume this meaning is roughly that N' (the rest of the

nominal) is attributed to the genitive Noun Phrase. If I attribute *hat* to *the professor*, the relation could be that he owns it, but just as well that he designed the hat, or that it is an example that he discusses frequently in class, and so on. The fact that ownership is the situation that occurs most frequently between these kinds of element in the world is irrelevant to grammar. In (b), in attributing *examination of the students* to *the teacher*, the relation is most likely agenthood, given the potential referents of the expressions. (pp. 272-273)

ここで、属格名詞句と残りの名詞の意味内容だけがわかれば、これらの名詞句の意味が説明できると述べられていることに注目したい。hat の意味内容と the professor の意味内容がわかれば、この名詞句の意味は「教授の帽子」とも「教授がデザインした帽子」とも「教授がクラスで論じている帽子」とも解釈できるのである。本稿で論じた素性照合によるノ格名詞句の解釈と通じるものがある。

参考文献

- Abney, S. P. (1987). *The English noun phrase in its sentential aspect*. Doctoral dissertation. Massachusetts Institute of Technology.
- Akaso, N., & Haraguchi, T. (2011). On the categorial status of Japanese relative clauses. *English Linguistics* 28 (1), 91-106.
- 赤楚治之, 原口智子. (2011). 「が・の」交替に見られる Theme 主語と Agent 主語の非対称に関して. 日本言語学会第 143 回大会 (於大阪大学) での口頭発表.
- Bedell, G. (1972). On no. In *UCLA papers in syntax 3: Studies in East Asian syntax*, 1-20.
- Berwick, R. C. (2017). A feeling for the phenotype. In J. McGilvray (Ed.), *The Cambridge companion to Chomsky*, Second Edition (pp. 87-109). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bouchard, D. (2013). *The nature and origin of language*. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, N. (1995). *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Culicover, P. W., & Jackendoff, R. (2005). *Simpler syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, C. J. (1968). The case for case. In E. Bach & R. T. Harms (Eds.), *Universals in linguistic theory* (pp. 1-88). New York: Holt, Rinehart and

- Winston, Inc.
- Gleason, H. A. (1965). *Linguistics and English grammar*. New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Harada, S. I. (1971). Ga-no conversion and idiolectal variations in Japanese. *Gengo Kenkyu*, 60, 25-38.
- 原口庄輔, 中村捷, 金子義明 (編). (2016). 『増補版チョムスキー理論辞典』. 東京: 研究社.
- Hiraiwa, K. (2001). On nominative-genitive conversion. *MIT Working Papers in Linguistics*, 39, 66-125.
- 菊田千春. (2002). が・の交替現象の非派生的分析—述語連体形の名詞性. 『同志社大学英語英文学研究』, 第 74 号, 93-136.
- 国立国語研究所. (1951). 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』. 国立国語研究所報告 3. 東京: 国立国語研究所.
- Kuno, S. (1973). *The structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Maki, H., & Uchibori, A. (2008). Ga/no conversion. In S. Miyagawa & M. Saito (Eds.), *The Oxford handbook of Japanese linguistics* (pp. 192-216). Oxford: Oxford University Press.
- 牧野誠一. (1980). 『くりかえしの文法—日・英語比較対照—』. 東京: 大修館書店.
- 松下大三郎. (1930/1961). 『標準日本口語法』. 東京: 白帝社.
- 三原健一. (1994). 『日本語の統語構造—生成文法理論とその応用—』. 東京: 松柏社.
- Miyagawa, S. (1993). Case-checking and Minimal Link Condition. *MIT Working Papers in Linguistics*, 19, 213-254.
- Nakai, S. (1980). A reconsideration of ga/no conversion in Japanese. *Papers in Linguistics*, 13 (2), 279-320.
- Ochi, M. (2001). Move F and ga/no conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 10, 247-286.
- 越智正男. (2016). 名詞修飾節における格の交替現象. 村杉恵子, 斎藤衛, 宮本陽一, 瀧田健介 (編), 『日本語文法ハンドブック—言語理論と言語獲得の観点から—』 (pp. 146-188). 東京: 開拓社.
- 大島資生. (2010). 『日本語連体修飾節構造の研究』. 東京: ひつじ書房.
- Radford, A. (2016). *Analysing English sentences*, Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Reinhart, T. (1983). *Anaphora and semantic interpretation*. London and Canberra: Croom Helm.

- Saito, M. (2004). Genitive subjects in Japanese. In P. Bhaskararao and K. V. Subbarao (Eds.), *Non-nominative subjects* (pp. 103-118). Amsterdam: John Benjamins.
- Shibatani, M. (1975). Perceptual strategies and the phenomena of particle conversion in Japanese. In R. E. Grossman, L. J. San, & T. J. Vance (Eds.), *Papers from the parasession on functionalism* (pp. 469-480). Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 柴谷方良. (1978). 『日本語の分析—生成文法の方法—』. 東京: 大修館書店.
- 山口明穂, 秋本守英 (編). (2001). 『日本語文法大辞典』. 東京: 明治書院.
- Yamashita, S. (1988). *Resolving the problem of Japanese no: An analysis of words*. Doctoral dissertation. The University of Arizona.
- 山橋幸子. (1998). 節構造の普遍性—「が／の交換」分析. 『比較文化論叢』(札幌大学文化学部紀要), 45-58.
- 山橋幸子. (2000). 「ガ／ノ交替」再考: 文レベルからの考察. 『札幌大学総合論叢』, 第10号, 15-27.
- Yoda, Y. (2011). Nominative genitive conversion: Strike back with feature transmission and cartography. *Studies in Japanese Language and Culture*, 21, 33-42.
- Yoda, Y., & Nambu, S. (2011). A cartographic approach to nominative/genitive conversion in Japanese. Online Proceedings of Glow in Asia Workshop for Young Scholars 2011.